尾崎＝ゾルゲ研究会 通信 号外　2024年５月12日（日）

尾崎＝ゾルゲ研究会「通信」号外

第六回　尾崎＝ゾルゲ研究会研究会

「尾崎＝ゾルゲ事件と『オットーと呼ばれる日本人』との交錯をめぐって」

（日本平和学会平和文化分科会・尾崎＝ゾルゲ研究会・愛知大学尾崎＝ゾルゲ研究プロジェクト共催）

2024年6月1日（土）14時～16時　於　学習院大学（現況会場未定）
（リモート参加のURLは後日ご案内致します）

報告１　20世紀共産主義の総括へ―『オットーと呼ばれる日本人』劇評１
島村輝（フェリス女学院大学教授）

報告２　レ・コミュニストとは何者であったのか？―『オットーと呼ばれる日本人』劇評２
鈴木規夫（愛知大学教授）

討論　加藤哲郎（一橋大学名誉教授）

司会　渡辺守雄（筑紫女学園大学教授）

＊ご参加頂ける方々は、こちらからお申し込み下さい。
→https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeihVt_iJf2dVS6hOberMB9x9Lt-Lh_szyWm9QW2_Ty3vUlFg/viewform

尾崎＝ゾルゲ研究資料蒐集、聞き取り調査などの実施について引き続き、是非ともご協力のほどお願い申し上げます。ご用の向きは、以下の事務局へご一報頂ければと存じます。
尾崎＝ゾルゲ研究会事務局：愛知大学名古屋校舎鈴木規夫研究室気付　norioszk@vega.aichi-u.ac.jp/　20221107os@gmail.com

報告1 レジュメ
20世紀共産主義の総括へ―『オットーと呼ばれる日本人』劇評１
島村　輝

太宰治の「待つ」は本のページ数にして三頁にも満たないほどの小品である。年譜によれば掲載予定の号は『京都帝国大学新聞』第三百四十四号（1942年3月５日付発行）であったとされているが、時局にふさわしくないという理由で原稿を返却され、のちに単行本『女性』（1942年６月、博文館）に収録され刊行された。

ぼんやりと駅のベンチに腰掛ける娘の脳裏に去来する「期待」「恐怖」「あきらめに似た覚悟」などの「けしからぬ空想」、そしてそうした「軽はずみな空想を実現しようと」いう「不埒な計画」を胸中にちろちろ燃やしている「みだらな女」の正体は、一体何なのだろうか。ただの「男女関係への期待」とは到底思われない。また「戦争終結への漠然とした希望」というだけでは、この言葉の強度にはそぐわない。「待つ」の主人公は、時局に抗するように、ただひたすら何ものかを待つという行動をとっていた。しかしそれが何者であるか、何であるかということに対しては、作品中にははっきりとは書かれていない。これが大きな謎になっていた。

そこで思い浮かぶのが、太平洋戦争の開始直前に発覚したゾルゲ事件とその企ての内容である。ゾルゲ事件には尾崎秀実というコミンテルンのエージェントが関わっていたわけだが、尾崎秀実はまた当時の総理大臣近衛文麿の側近でもあった。そして日中戦争の開始当時、尾崎は日中戦争の早期解決に反対をした。なぜかといえば、帝国主義戦争を拡大することによってその攻撃国、帝国主義国を解体させ、その解体から内乱、そして革命へということを企てていたことが考えられるのである。『オットーと呼ばれる日本人』の立ち位置が、戦中の転向文学者の志とどのような接点があったのか。20世紀の夢としての「共産主義」運動の一局面を、観劇を踏まえて考えてみたい。

報告2 レジュメ
レ・コミュニストとは何者であったのか？―『オットーと呼ばれる日本人』劇評２
鈴木規夫（愛知大学教授）

劇団民藝創設者の1人である宇野重吉演出による『オットーと呼ばれた日本人』の初演は1962年7月～8月である。「第二次世界大戦前夜の最大のスパイ組織の諜報内容、方法を示す基本資料」「ゾルゲの手記、検事・予審判事訊問調書、判決文等を収録」した『現代史資料１　ゾルゲ事件（一）』初版がみすず書房より刊行されたのは、この初演直後の1962年8月であり、初演シナリオに『現代史資料』は活用されてはいない。尤もそこに収録されていた「記録」の数々さえ「叙事的」であるのかどうかは疑わしい。尋問調書も上申書も、予め企図された事実を構築するためのものであることに変わりはない。だが、少なくともいわゆるウィロビー報告（『赤色スパイ団の全貌　ゾルゲ事件』福田太郎訳、東西南北社、1953年）より「叙事的」ではあるだろう。

後に木下順二は、「（ウィロビー）報告を信用するかしないかということは私にとってどうでもよかった。オットーと呼ばれる一人の日本人を私は書きたいと思った」と語っているのだが、初演当時は、ブレヒトの叙事的演劇理論に沿った演劇作品であると評された。

ブレヒトの叙事的演劇理論とは、アリストテレスに基づく古典的な演劇論（第三者が客観的に物語る叙事詩と目の前で展開されるドラマ行為としての劇詩すなわち演劇を区別し、ドラマにおいては観客が感情を揺さぶられてカタルシス効果を得るとする）を否定し、演劇は、距離をもって批判的に観察・認識させようとする方法により、叙事的で観客に冷静で批判的な視点を与えるべきであるとするものであった（むろんこうした考え方自体マルクス主義と密接な関係があるとされている）。叙事的演劇では、演技に引き込まれて人物に感情移入することを妨げる方法があえて取り入れられ、同化ではなく異化効果を作り出すべきであるとされたのであった。すでに1955年の段階で「ドラマトゥルギーは、技術でなく思想である」と言う木下順二は、その数年後の『オットーと呼ばれた日本人』により叙事的演劇を試みることになる。そして、その叙事的方向へ向かう傾向は挫折し、「ドラマ」は生まれない日本近代劇の特色を示す一つの好例とされている。

だが実は、その「素材」とされたいわゆる「尾崎＝ゾルゲ事件」において「叙事的」であることそれ自体現在でもなお問われている。

上海で尾崎をゾルゲに引き合わせたのは、スメドレーでもましてや川合貞吉でもなく、鬼頭銀一であったことはつとに尾崎秀実自身が確認し弁護士へも書簡で知らせているところであった。1974～75年の東京演劇アンサンブル第58回公演『オットーと呼ばれた日本人』のパンフ表紙にはその尾崎直筆の手紙がコラージュされており、木下順二も歴史的事実はそうであろうと認識していたはずなのであるが、シナリオ自体を大きく改稿することはせず、その同じパンフに「越境した抵抗者の遺産」と題した文章を寄せて、次のように述べている。

「申しわけないほど、といっていいくらいたびたび、私はサルトルのあのことばをこれまで引用したことがあるのだが、この点についてはあんまり気がついていなかったような気が今している。あのことばというのは「当時、選択は簡単でした――自分の選択を固守するのに、大変な力と勇気が必要だったにしろ―やはり選択は簡単でした」（白井浩司訳）ということばであって、この点というのは、それにすぐ続くことばが次のようなものであったということの意味についてである。「つまり、ドイツ人に組みするか敵対するかしかなかったのですからね、黒か白かというようなものですよ。」――つまり当時のフランスでは、敵は自国人ではない他国人であったという点が、当時の日本とは違っていたのだという単純な事実に、私はあんまり気がついていなかったような気がする。……オットーと呼ばれる一人の日本人を私は書きたいと思った。そしてその日本人を形象化するに当って、尾崎秀実という、かつてせい一杯にその生命を生き切った実在の人の実際の行動から、遠慮なく素材を与えてもらったということになる。」そして、「尾崎秀実の生涯は、思想的課題としての日本における抵抗の問題――より正確にいえば、日本における主体造出の問題を、われわれに切実に考えさせてくれる」というのである。

かつての日本における抵抗の主体造出の問題が「レ・コミュニストとは何者であったのか？」という世界的文脈においてどのような意味を持ったのか。ウクライナやガザばかりでなく世界の大きな構造変動が起きている現代の「切実な」問題としてのそれを、今回の再演を通じて考えていきたい。